

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

西野壯平 写真家

Sohei Nishino / Photographer



CREATOR^{No} INTERVIEW 92

西野壯平 Sohei Nishino

1982年兵庫県生まれ。大阪芸術大学写真学科を2004年に卒業、その後活動の拠点を神奈川と静岡で制作活動を行っている。近年の主な展示に、2012年 OUT OF FOCUS: PHOTOGRAPHY (Saatchiギャラリー, ロンドン)、2013年A Different Kind of Order (The ICP トリエンナーレ, ニューヨーク)、2015年 NEW DIORAMAS (マイケルホッペンギャラリー, ロンドン) など。2016年秋にサンフランシスコ近代美術館にて個展が開催される。

パブリックな展示が似合う場所。
だから、街中に写真があふれたフェスティバルを。

No

92 西野 莊平 写真家

SOHEI NISHINO / Photographer

クリエイターインタビュー

『写真を見て歩くという意味づけをすることで
六本木を歩くことがもっと楽しくなる』

photo_hirokuni nakagawa / text_akiko miyaura

世界中を歩き、旅することを通して自身が得た、体験、経験をさまざまな視点から写真で記録。さらにひと都市で撮り続けた写真を重ね合わせて、1枚の地図へと変貌させる作品『Diorama Map』はすでに 20 都市を数えるといいます。世界の都市を見つめ、生身で街や人、生活を体感してきた西野壯平さんが歩いて見つけた六本木のおもしろさ、この街で実現したいアートについて語ってくれました。

六本木はひとつのエリアでありながら、ひとつの都市。

現在、「21_21DESIGN SIGHT」で開催している企画展『写真都市展 -ウィリアム・クラインと 22 世紀を生きる写真家たち-』にも参加していますが、以前に六本木のギャラリーで展示をした際に 1 か月ほど通っていたので、六本木は自分なりに思い入れのある街ではあるんです。また、東京を題材にした作品を制作したときも、六本木を結構歩きました。『写真都市展』に出展している僕の作品『Diorama Map』は、自分の足跡が 1 枚の地図になるというのがコンセプト。経験や体験すべてが 1 枚になっていくので、その場所での滞在が長ければ長いほど、写真の枚数が多くなるんです。当時の地図を見ると、六本木の写真が意外と多い。つまり、それは滞在時間が長かった、たくさん歩いたということ。それだけ、歩くことがおもしろかったということなんです。

歩く前の六本木は、多くの方と同じようにギラギラしていてダークな街というイメージが強かったです。むしろ、外から来る人たちは六本木に " 生活感のない東京 " を求めている部分もあると思うんですね。でも、実際に歩いてみるとそうではない。いちばん感じたのはレイヤー、ギャップのすごさでした。



『写真都市展 -ウィリアム・クラインと22世紀を生きる写真家たち-』

写真、映画、デザインなどジャンルを超えた表現と、世界の都市をとらえた作品で、現代の視覚文化に決定的な影響を与えた写真家ウィリアム・クライン。彼の都市ヴィジョンを迫力あるマルチ・プロジェクトで表現するほか、斬新な眼差しで21世紀の都市と人間を見つめ、従来の写真のフレームを大きく飛び越えようとする日本やアジアの写真家たちを紹介する。

会期：2018年2月23日(金)～6月10日(日)
21_21 DESIGN SIGHT ギャラリー 1&2
<http://www.2121designsight.jp/>



『Diorama Map』

世界の都市に暮らすように滞在し、さまざまな角度、視点から写真を撮影。静岡のアトリエでみずから現像、カット、コラージュするという過程の中で旅の記憶を呼び起こし、すべての経験、体験を1枚の地図にする西野さんの代表的作品。

たとえば、高い場所にも地下の世界にも見どころがありますし、昼と夜の街の顔にもギャップがあります。表通りはガラガラした印象ですが、一歩中に入ると神社やお寺、美術館といった静かな場所もある。あらゆるレストランやカフェ、そして人の生活が垣間見える場所も、下町っぽい雰囲気を感じる場所もあって、ひとつのエリアでありながら、都市 " 東京 " の縮図が見えるんですね。これだけすべてのものが凝縮している街って、なかなかない気がします。

" 迷う " ということが、その街を知ることにつながる。

僕は作品づくりのために、能動的に路地を歩くのですが、そのなかで " 迷う " ということが重要だと感じます。地図は持たず、気の向くまま、自分が都市の中に溶けてしまうような感覚になるまで歩きます。そこに行き着くと頭の中が空っぽになって、たとえば、「次の道を右に曲がろう」「左に行こう」と考えず、直感で動けるようになる。よく「" こういうところで撮る " という、しっかりしたイメージを持って撮影しているんですか？」と聞かれるのですが、まったくそういったことはなくて。言い表すなら " 音が鳴る方へ " という感じでしょうか。

直感、感覚に従って歩いていると、どんどん狭い路地に入って迷子になることもあるのですが（笑）、それが " 場所を知る " ことにつながるんですよね。それに、路地って単純におもしろいじゃないですか。人の声が聞こえ、軒先に花が植えられ、窓辺にカーテンがなびき……。そういうものを見るのが、すごく好きなんです。街の色や音も、音が聞こえてくるボリュームも、出会う人も街ごとが変わる。とくに東京はエリアごとにまったく色が違いますし、特に六本木はいろんな文化、人が入り混じった場所。その路地裏には、街の姿が表れている気がするんですよね。

東京を題材にした僕の作品は、2004年につくった『Tokyo2004』、10年後の2014年に制作した『Tokyo2014』とふたつあるのですが、『Tokyo2004』のころは大阪に住んでいて、東京に通いながら撮影をしていたんです。たしか1週間滞在して撮って、1週間戻って、また来て、というのを3回くらい繰り返したかな。だからか、2004年のほうは偏った観光者の目線という感じで、23区の西を撮っていることが多く、隅田川辺りはあまり入っていないんですよ。一方、『Tokyo2014』は自分が東京に住んでいるところに撮影したので、それこそ水が多いな、公園が多いなというように、生活して感じた東京が反映されている。建物が建った、スカイツリーができたという物理的な変化だけでなく、10年間に東京への視点が変わっているんですよね。2024年にも撮影したいと考えているのですが、今は東京に住んでいないので、離れてもう一度見たときにどう映るのが自分でも楽しみなんです。

" 極端なもの " が時代や文化をつくる。

もし、今2018年の六本木を撮るとしたら、やはり1か月くらいは歩き回るとします。先ほどお話ししたレイヤーのおもしろさやギャップの見えるところだったり、高い視点から、どんどん下にさがっていくような感覚だったり……。見えるもの、感じるものを直感で撮影していく感じになるんじゃないかな、と。写真家って、目の前にあるものをキャッチする感覚が強いと思うんですよ。だから、10年後にまた六本木を撮るなら、2018年に歩いたルートを辿って、そのときにある目の前のものを撮影するとおもしろいんじゃないかなと思います。

『Tokyo2004』(左)、『Tokyo2014』(右)



東京を題材にした『Diorama Map』を、2004年とその10年後の2014年に制作。東京中を歩き回り、その瞬間の人と街を記録した。『写真都市展 ―ウィリアム・クラインと22世紀を生きる写真家たち―』では、『Tokyo2014』を展示中。



西野荘平 写真家

SOHEI NISHINO / Photographer

photo_hirokuni nakagawa / text_akiko miyaura

街の中心に " 静 " があるのは、世界を見渡しても東京だけ。

東京だけでなく、これまで世界 20 か国の『Diorama Map』をつくってきましたが、海外に行くときは 1 か月~1 か月半ほどアパートを借りて、現地の人々の生活になじむような滞在をするんですよ。最初にするのはヘアカット。" バーバープロジェクト " と呼んでいるのですが (笑)、現地の人間になるという意味で、ローカルな床屋さんに行って髪を切るんですね。アムステルダムなら「アムステルダムのヘアカットにしてください」とだけ言って、その人に委ねるんです。

インドでは、路上で散髪している人をお願いしたのですが、テクノカットのような、サイドがパキッと揃った焼海苔のような髪型になりました (笑)。切り終わって鏡を見せてもらったとき、「いいだろう?」という感じでドヤ顔をされるんですよ。思わず自分でも笑っちゃいましたが、ある意味、潔くて気持ちよかったです。それから、東京の浅草では髭も眉毛も剃られ、ザ・七三の昔の演歌歌手のような髪型にされたこともありました。最初にヘアカットをすることで、土地の間人になっていくような感覚があり、何か別のものが見えてくるような気がするんです。

" バーバープロジェクト " を終わると、街を歩くことから始めます。まずはカメラを持たず、2、3日ほど歩き回りますが、最初に " 街の中心 " を探すんですよ。地理学的な中心ではなく、その街が中心を置いている場所やもの、たとえばロンドンならテムズ川、ヨハネスブルクはポンテタワーというように、そこを中心に都市が広がっていく場所へ行くんです。

じゃあ、東京で言うと " 中心 " は何なのか。僕のイメージでは、皇居なんですよ。地図上でも 23 区のまんなかあたりますが、おもしろいのは " 静 " が街の中心にあること。皇居ってその中に新たな建物をつくることも、大きな音も出すこともできない、非常に神聖な場だと思うんですよ。そういった " 静 " が都市の中心にある街って、僕は東京以外に知らないんです。世界の大都市のひとつとして括られがちですが、またちょっと違う感じがしますね。そうやって、いろんな国で街の中心は何なのか、人々の生活がどこを起点にしているのかを探ると、都市ごとの違いを認識することができるんです。

反発し合い、ときに融合する展示が見せる都市の姿。

『写真都市展 -ウィリアム・クラインと 22 世紀を生きる写真家たち-』では、大小 11 点の作品を展示しているので、都市ごとの違いを見ていただけたと思います。これまでもグループ展には参加させていただきましたが、今回は展示方法がおもしろいんですよ。写真の展示は壁面に並べることがベーシックですが、床と平行の箱の上に写真があったり、宙につるされていたり、音楽と写真が融合していたり。作家それぞれの作品のエネルギーがぶつかり合っているようで、ときに交わり、融合し合う ある部分ではすごく反発していて、ある部分ではすごく合致していて、腑に落ちるような、落ちないような。その感覚が " 都市 " をテーマにした作品の集合体という感じがします。

都市を撮るときの感覚は、写真家の記憶や経験、体験によって捉え方が変わると思うんですね。それがいい化学反応になりそうだと、このインスタレーションを見てすごく感じました。きっとご覧いただく方も作品によって視点が違うので、ぐるぐると視線を振り回されると思うんですよ。そういう経験って写真展では珍しいですし、それこそが " 都市 " の中にいる感覚と重なるんじゃないかな、と。ぜひ、多くの方に体感していただければと思いますね。



西野 荘平 写真家

SOHEI NISHINO / Photographer

photo_hirokuni nakagawa / text_akiko miyaura

旅人と住人の境界線はどこに？

制作で海外に滞在する場合、2、3日街をひたすら歩いたあとは地元の人たちと交流を重ねながら、いろんな場所へ足を運びます。「こういう場所があるよ」と聞いては、「今日はここへ行こう」「明日はあのエリアに行こう」とざっくり決めて、そこから派生していくような感じですね。『Diorama Map』は正確な地図とは違いますが、作品のアウトプットとして地図という形を目指している。そのためには、あらゆる場所に足を運ぶことが必要なんです。

現地で1か月～1か月半ほどアパートを借りて、現地の人の生活になじむような滞在をするという話をしましたが、やっぱりどこまでいっても"本当の住人"にはなれない。ただ、"自分がどこにいるのか"を把握する期間というのがあって、それが僕の中で設定している旅の期間なんです。2か月を超えると、街の人の目線になってしまう。そうすると、撮るものに対して、もう少し個人的な感覚が強くなる気がするんですよね。"旅人"として居られる期間は、Max1か月半。それが、自分の中の感覚としてあるんです。以前、仕事とは違う目的で、海外に1か月半以上滞在したことがあるんですけど、毎日のように歩いていると"知りすぎちゃう"んです。あくまで作品づくりであって、地元の人になることが目的ではないので、エンドを決めるようにはしていますね。

旅から戻ると、静岡のアトリエでの作業が始まるのですが、そのときはまだ旅が続いているような感覚なんです。トータルで4、5か月の時間をかけるので、途中止まると、記憶がつかなくなっていかない。だから、帰ってからの作業は連続してやりますね。大体フィルムで200～250本撮るので、現像するだけでも結構大変なんです（笑）。現像したら暗室でコンタクトシートに焼き、1枚1枚カットしていけますね。それをキャンバスに貼り合わせていって、最後にもう一度複写するというのが作品をつくる流れ。

今の時代を思えば、デジタル上でコラージュして手間のかかる作業を丸ごと省くこともできる。でも、それだと記憶がつかなくなっていかないんです。すべてが集約された何万枚の写真の記憶をさかのぼるには、身体的な接触が大事だと思っています。ペラペラしたフィルムの質感だったり、現像するために濡らしたり、乾かしたりしながら手で触ること自体が重要。身体的なアプローチが、記憶を舞い戻してくれる、巻き戻してくれるという感覚があるんです。そうやってできあがった1枚の『Diorama Map』は自分自身の足跡であり、その時代、その瞬間の、街や人の記憶でもあると思っています。

地形を活かしたパブリックな写真展示を六本木でも。

写真に触れるという話で言うと、スイス西部のヴヴェイという小さな街で、『Images』という写真のフェスティバルがあって、僕も作品を出展したことがあるんです。そのときの作品『Diorama Map "Bern"』はターポリンという素材に写真をプリントして、駅の近くの広場に置いて、その上を街行く人が歩けるような展示方法にしました。スイスのベルンという街の『Diorama Map』だったのですが、現地の人たちにはなじみのある街なので、地図上を歩きながら子どもたちが「あ、この辺はここだ!」「友だちの家がある」と楽しんでくれたんですよ。パブリックな場で体感できる展示というのは、おもしろい体験でした。

ほかの写真家も、本当にいろいろな展示方法をしていましたね。丸いドーム型の警察署を覆うように全面に写真をプリントしたり、レマン湖という湖の上に写真を浮かべたり、ホテルの壁面一面に滝の写真をプリントして貼ったり……。建物の中での展示は1割程度で、あとの9割は外。つまり、パブリックスペースに展示されているんですね。きっとそういうパブリックな写真展示みたいなスタイルって、六本木にもすぐ合っていると思うんです。

たとえば、六本木にいっぱいある坂を利用して、坂自体に写真をプリントしたり、坂の先に立つ高い建物にプリントして遠くからも作品が見られるようにしたり。あと、道や芝生に六本木の街のイメージとは真逆の写真をプリントして、地上にいる人からは何かよくわからないけど、六本木ヒルズの展望台だとか高い場所から見ると鮮明になるというのもおもしろいなって思います。世界からいろんな作家を招聘して、いろんな作品を街中のパブリックな場に置けたらいいですね。

『Images Vevey』

スイス西部の街ヴヴェイで2年に一度行われるフォトフェスティバル。駅や教会、学校、カフェやデパートなど、さまざまなパブリックスペースを使ってアート写真が展示される。



『Diorama Map "Bern"』

『Images Vevey』に出展した西野さんの作品。耐水性、耐久性を持った素材「ターポリン」に『Diorama Map』をプリントした10m×10mの作品。会議室のテーブルほどの高さのボードをつくり、その上に作品を貼って展示した。



『Diorama Map "New York"』

「アメリカ同時多発テロ事件」から5年後の2006年、再びニューヨークを訪れ、そのときの街の姿を記録した作品。

"1 億総カメラマン時代" の写真ワークショップ。

最初にも話しましたが、六本木は歩いていても楽しくて、歩くほどに違った街の姿が見える。僕自身がそれを体験したので、さらに " 写真を見て歩く " という意味づけを何かひとつ加えると、もっともっと楽しめるんじゃないかなと思います。

個人的にワークショップを考えるなら、100 人くらいの人に、六本木を数時間歩いて写真を撮ってもらい、みんなで貼り合わせてひとつの地図をつくるというのもおもしろいですね。今はケータイを含めるとカメラを持っていない人がいないくらい、みんながカメラマンという時代なので、そういった試みもできるのではないかなと思います。

これまで東京をはじめ、世界の都市で撮影をしてきましたが、最近、興味深いなと思っているのが " 川 "。僕自身、川に行くとき心がすごく落ち着くんですよ。それに、道に迷うと自然と川を探してしまう。それはなぜかと考えていて。きっと昔の人たちも川を見て、この水がどこから来てどこに行くのかと想像したと思うんです。風景は変わっても人が感じること、想像することは同じで潜在的な意識や感覚は変わらないということに、安心感を覚えるのかもしれない。

そして、発展し多くのビルが建っている都市が、なぜこれだけ変化してきたのかと歩きながら考えていると、物流のしやすさとか、環境のよさといった人が集まる理由が見えてくるんです。そこには必ずと言っていいほど、水辺の風景があるんですね。生活に必要なモノが流れてくる、人が流れてくる、文化が流れてくる……。そういう経験が蓄積されて、今の姿になっているんだとあらためて感じるんです。

年月を経てもう一度撮りたい街。

そんなことを感じながら、ちょうどイタリアのポー川をテーマにした作品『IL PO』をつくったばかりなんですよ。アルプスからアドリア海まで約 650km に渡ってイタリア北部を流れている川なのですが、山に登って水がちよろちよろと湧き出るところから、徐々に広がって海へとつながっていくところまで、水辺を旅しながら写真を撮っていきました。「水は循環しているんだ」と再確認できただけでも、僕にとっては大きな体験でしたね。

『IL PO』



イタリアのポー川の水辺を旅してつくった最新作。アルプスから海へ注ぐまでのストーリーを西野さんが体験した写真で1枚の地図に。8m四方ほどのワイドな作品。

今のところ、東京以外でふたつ目の『Diorama Map』をつくったことはないのですが、ニューヨークはもう一度撮りたいという思いがあるんです。2001年に起こった『アメリカ同時多発テロ事件』の当日9月11日に、実はニューヨークにいたんですね。しかも、事件前日にはワールドトレードセンターにいた。あの風景がゼロになったときに作品をつくりたいと思い、『Diorama Map "New York"』を制作したんです。その先、どんな風景になっているのか、新しい何かがあるのか。思い入れのある街でもあるので、いつかもう一度撮れたらと思っています。

取材を終えて……

インタビューでうかがった作品づくりの視点、過程が非常に興味深いのはもちろんのこと、旅先でのおもしろエピソードも豊富。取材後には、アフリカのレストランで初対面した「羊の脳みそ」の話でひと盛り上がりしました。「結構な臭みがあって、なかなかのものでしたよ」と笑う西野さんですが、本当の意味でフラットだからこそ、どんな国でも現地の人に受け入れられるのだろうと感じました。(text_akiko miyaura)